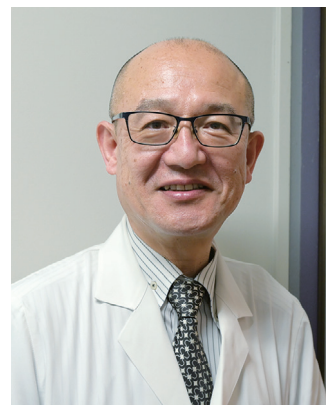


新病院長ごあいさつ

「救急体制強化」「安全・安心」 「DX化」を軸に 進化する医療で地域を支える

東海大学医学部附属八王子病院長
消化器内科

鈴木 孝良 教授



●すずき・たかよし 1989年3月東海大学医学部医学科卒業。博士（医学）。アメリカ・ミシガン大学留学、東海大学医学部附属東京病院診療部長、同医学部附属病院消化器内科教授、内視鏡室長、同医学部附属八王子病院副院長などを経て2026年度から現職。日本内科学会（認定医、指導医）、日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会（指導医、評議員）、アメリカ消化器病学会、日本胃癌学会、日本食道学会、日本消化管学会（指導医、代議員）

当院は、南多摩医療圏における急性期医療の拠点として2002年3月に開院して以降、「理解と調和の精神とリスクマネジメントに基づいた、患者中心の心温まる医療」を基本理念として着実に歩みを進めてきました。現在は、がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院、難病医療協力病院、紹介受診重点医療機関などの指定を受け、行政機関や医師会、近隣医療機関と緊密に連携しながら地域の基幹病院としての使命を果たしています。

また、災害時に重症患者の収容・治療を担う東京都の災害拠点病院として、関係機関と協力して訓練を行うなど、大規模災害対策にも注力しています。

高齢化が進み、医療ニーズのさらなる高度化・複雑化が予想される中、何より重要なのは、安全を最優先とした医療体制の確立です。そこで、2026年度は、「進化する医療で地域の安全・安心を支える」をスローガンとして、3つの重点施策を軸に病院運営を進めてまいります。

救急患者の受け入れ体制を強化 予防型医療安全体制の確立も

1つ目は、地域医療機関との連携と

救急医療体制の強化です。当院では、超高齢社会で増加している救急医療需要に対応するため、各診療科のオンコール体制を充実させ、緊急時に専門医が速やかに対応できるシステムの充実を図っています。今年度はさらに、救命救急科の医師を5人から8人に拡充するなど、より多くの救急患者さんに対応できる体制を整えました。

急性期は当院で治療し、容態が安定した後はスムーズに患者さんを地域の医療機関にお送りできるよう、病診連携をさらに深めたいと考えています。

2つ目は、「Safety-II」と「OODA」（Observe・Orient・Decide・Act）の考え方を取り入れた予防型医療安全体制の確立です。医療の質を支える基盤は安全であり、安全なくして信頼は成り立ちません。そこで、問題の原因を究明する「Safety-I」の視点に加えて「Safety-II」の考え方を重視し、日常診療がなぜ円滑に機能しているのかを分析した上で、その強みを組織として強化していきます。

また、変化の激しい医療環境に対応するため、「OODA」の循環を意識し、変化を的確に捉え迅速に対応できる体制を構築します。

さらに、ヒヤリ・ハット事例の共有や

業務プロセスの標準化、「Closed-loop communication」の徹底を通じて、安全を個人の努力に依存するのではなく、組織として担保できる仕組みへと高めていきます。

職員一人ひとりが主体的に行動し、互いに声を掛け合い支え合う「協働」の文化こそが、安全・安心を担保し、真に強い病院を支える基盤です。「協働」の一例が、内視鏡治療のため抗血栓薬の使用を中断した患者さんへの再投与に関するチェックシステムの導入です。薬剤科を中心に多職種が確認することで、適切な時期の再投与開始が、これまで以上に確実に実施できるようになりました。

「RRT」（Rapid Response Team）のメンバーが夕方に入院患者さんを回診し、急変の可能性を察知して事前

に重症化を防ぐ運用も成果を上げています。今後も安全を最優先の価値として掲げ、その文化の醸成に継続して取り組んでいきます。

人々の健康を諸機関と “共に支える” 地域完結型医療を目指す

3つ目は、診療の質と効率を高める医療DXの推進です。働き方改革による人手不足や人件費の上昇、物価高騰などにより医療を取り巻く環境が厳しさを増す中で、医療の質向上と医療従事者の負担軽減を両立させるためには、医療DXの推進が不可欠です。

診療記録や退院時サマリーなどの自動作成、情報共有などへのAIの活用を段階的に進め、医師や医療スタッ

フの事務負担を軽減し、業務の効率化を図ります。この取り組みは、医療者が患者さんと向き合う時間を確保するとともに、安全で温かみのある医療を実践するために重要な基盤整備と考えています。

さらに、外来診療や検査を効率的に進めて待ち時間を短縮するといった、患者さんの負担を軽減する取り組みも行っています。たとえばCT検査については、準備の流れを工夫することで、より多くの患者さんに対応できるようになりました。今年度は新たにMRIを1台追加しており、臨床検査技師や診療放射線技師の増員も検討しています。

外来の患者さんにつきましては、ご予約とともに事前に紹介状をお送りいただくと、あらかじめ患者さんの情報を把握できるため、スムーズに診療

に入れます。このように、今後は、地域の先生方と患者さんにご理解とご協力をいただきながら、より効率的かつ適切な診療を進め、少しでも患者さんのご負担を減らしたいと考えています。

南多摩医療圏では独居や施設入所の高齢者が多く、今後も増加すると予想されています。地域の医療機関との円滑な紹介・逆紹介体制をさらに充実させるとともに、自治体、福祉施設などとの連携をより深め、人々の健康を“共に支える存在”であり続けることが当院の使命です。大学病院分院としての専門性と総合力を生かし、「質」「安全」「信頼」を基盤とした医療の着実な提供に努め、地域完結型の医療を目指してまいります。引き続き変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

診療科トピックス

先進的画像下治療の拠点へ 画像支援下治療センター新設と 血管内治療の新展開

東海大学医学部付属八王子病院
画像診断科 教授 画像支援下治療センター長

小川 普久

IVR (Interventional Radiology = 画像下治療) は、CTや超音波などで体内を詳細に観察しながらカテーテルや針を用いて行う術式です。体を大きく切開しない低侵襲治療のため入院期間の短縮や早期回復が可能で、高齢者や基礎疾患のある患者さんに対しても適応できる点が特長です。IVRは、動脈硬化症の血管拡張術やステント留置術、動脈塞栓術といった「血管系」と、生検やドレナージなどの「非血管系」に大別され、当院では、血管内治療センターが両方を担ってきました。

超高齢化社会などを背景に国内のIVR実施件数は増えつつあり、当院でも需要が増加しています。こうした状況に対応するとともに、徹底した安全

性・被ばく管理と地域における画像支援下診療の充実を図るため、血管内治療センターから非血管系IVRを独立させた「画像支援下治療センター」を、今年度新設しました。

高度な読影と穿刺技術で 低侵襲の診断・治療を 一体的に提供

画像支援下治療センターでは、CTガイド下での生検や膿瘍ドレナージ、各種腫瘍に対するラジオ波焼灼術などを行っています。近年は、がん診療において病理診断や分子プロファイルの結果をもとに、使用する抗がん剤や治療方針を検討する個別化医療の重要性が認識されつつあり、特にCTガイ



●おがわ・ゆきひさ 2002年3月聖マリanna医科大学卒業。博士(医学)。米国スタンフォード大学客員研究員、聖マリanna医科大学病院ハイブリッド心臓大動脈治療センター副センター長などを経て22年度に東海大学医学部付属八王子病院画像診断科准教授に就任。24年度同病院血管内治療センター副センター長、26年度から現職。18年日本血管内治療学会賞、25年Japan Endovascular Symposiumベスト症例賞、26年Japan Endovascular Treatment Conference 優秀賞など受賞多数。日本IVR学会代議員、日本血管内治療学会評議員、日本脈管学会評議員

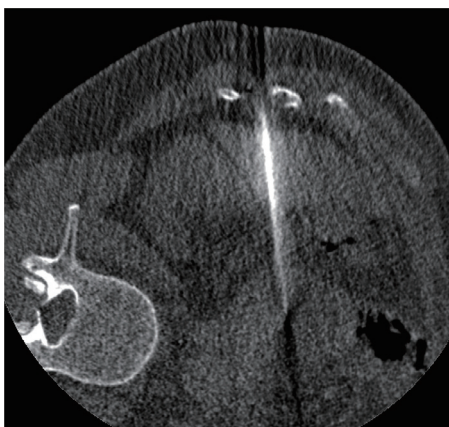
ド下生検への期待が高まっています。

生検は、患者さん一人ひとりの最適な治療戦略を立案するために極めて重要な役割を担っています。本センターには、病変部を正確に把握して周囲の臓器を傷つけずに穿刺できる高度な

PD術後膿瘍



CT支援下穿刺



7日後



膵頭部がんに対する膵頭十二指腸切除後の膿瘍形成の実例。IVRカンファレンスで穿刺部位や経路を検討し、CTや超音波などを駆使して肝臓を経由する穿刺を実施。術後7日目には膿瘍の虚脱が得られた。

技術を有する画像診断科の医師が所属しており、呼吸器内科や消化器内科・外科、腎泌尿器科、血液腫瘍内科などと連携して診療に当たっています。

単に“穿刺を行う部門”ではなく、精密画像診断を基盤として、確定診断から治療選択、低侵襲治療までを一体的に支える点が本センターの特長です。治療の適切なタイミングを逃さないためにも、確定診断が難しい場合や治療方針に迷う場合、穿刺の難易度の高い症例は、遠慮なくご相談ください。

また、本センターは各診療科や多職種をつなぐ“院内インフラ”として、診断・治療精度の向上はもちろん、合併症の低減や放射線被ばくの適正管理、安全な運用体制の構築にも尽力しています。さらに、患者さんと術者の被ばく量を軽減するため、VR技術を用いて事前に撮影したCT画像を患者さんの体に投影し、正確な位置に穿刺する手法の実用化に向けた取り組みも進めています。一人でも多くの患者さんに安全かつ先進的な低侵襲治療を提供できるよう努めていきます。

長期開存可能なステントの 医師主導治験開始 健康寿命延伸とQOL向上に貢献

一方、血管系IVRを専門とする血管内治療センターでは、センター長を務める画像診断科の長谷部光泉教授らが開発した、下肢閉塞性動脈疾患

(LEAD) の膝下 (BTK) 病変に対する新型ステントの医師主導治験を、今年度から開始しています。

これは、直径5mm以下の細い血管内に留置できる「BioStealth™ Stent」(バイオステルス・ステント) で、血管の屈曲や変形に耐え、血栓の付着を防ぐとともに再狭窄を抑える画期的な医療機器です。留置したステントには血管内皮細胞による被覆が早期に形成されてステルス化し、長期間のステント開存が期待できます。

このステントシステムは、高齢化社会の課題解決に役立つ革新的なアイデアとして、全米医学アカデミー (NAM) 主催の健康長寿グローバルコンペティションで「2024年カタリスト・アワード」を受賞、2026年1月には内閣府「日本医療研究開発大賞 スタートアップ賞」を受賞するなど、日本発・世界初の国家プロジェクトとして、世界各国から大きな期待と注目を集めています。

治験の対象になるのは、片側下腿のBTK領域に、対照血管径2.0mm以上4.0mm以下かつ病変長140mm以下の細径動脈硬化性病変を有する、症候性LEADの患者さんです。最初に被験機器による2例を実施し、それぞれ30日後の安全性を確認した後、無作為に被験機器群と対象群(バルーン拡張術) に25例ずつ分けて実施し、1年間のフォローアップを行って安全性と有効性を検証します。長谷部教授

が治験調整医師、私が治験責任医師を務め、当院のほか、大阪けいさつ病院、小倉記念病院、東京ベイ・浦安市川医療センターの4施設で実施します。

下肢の壊死が進行して下肢の切断に至った場合には、5年後の生存率が5割を下回ります。LEADですぐに治療が必要な国内の患者数は約18万人といわれていますが、潜在的な患者さんはさらに多いと推定されます。典型的な症状は足の痛みですが、年齢のせいにして我慢して受診が遅れたりして、治療に至らず悪化してしまうケースが多いのが実情です。

LEADの患者さんを早期に発見し、適切な治療につなげるのも本センターの役割です。そのためには、地域の先生方の協力が不可欠です。LEADを疑う基準の1つに、上腕と下肢の血圧の比較(足関節上腕血圧比=ABI)があります。ABIが0.9を下回れば、LEADの可能性が疑われます。足の痛みの原因が分からない場合や足の潰瘍を認める患者さんにこの検査を実施し、異常が認められた場合はぜひ本センターにご紹介いただきたいと思います。

IVRは、健康寿命の延伸やQOLの向上に貢献できる診断・治療として、対象領域が広がりつつあります。画像支援下治療センターと血管内治療センターは、機能を分担・補完しながら診療・教育・研究の発展を推進し、先進的画像下治療の拠点として地域の皆さまに貢献してまいります。

医療連携の会開催のご案内

6月22日(月)に京王プラザホテル八王子5階「翔王」にて、医療連携の会を開催します。この会は、地域の医療機関の先生方に、当院へのご理解を深めていただくとともに、地域の医療機関等の皆さまからご要望を直接うかがうことで、さらなる連携強化を図ることを目的に毎年実施しているものです。5月以降に地域の医療機関の皆さまにお送りする招待状に同封の参加申し込みはがきにてお申し込みください。多くの医療機関等の皆さまのご来場を病院スタッフ一同、心よりお待ちしております。



【日時】 6月22日(月) 19時30分～21時30分

【会場】 京王プラザホテル八王子 5階「翔王」

【次第】

第1部

1. 開会挨拶
東海大学医学部付属八王子病院 病院長 鈴木 孝良
2. 副院長紹介
整形外科 教授 内山 善康
腎泌尿器科 教授 座光寺 秀典
血液腫瘍内科 教授 横山 健次
看護部 部長 大村 里枝
3. センター紹介(講演あり)
救急センター センター長 飯塚 進一
呼吸器センター センター長 中川 知己
画像支援下治療センター センター長 小川 普久
4. 新任・着任教授紹介

画像診断科 教授 小川 普久
腎臓内科 教授 酒井 行直
糖尿病・内分泌内科 教授 村田 敬
脳神経外科 臨床教授 厚見 秀樹
画像診断科 臨床教授 市川 珠紀
リハビリテーション科 臨床教授 笠原 隆
病理診断科 臨床教授 杉山 朋子

5. 来賓ご挨拶

第2部 懇親会

【対象】 当院連携医療機関 等

【参加費】 無料

【お申込み】 招待状(5月発送予定)に同封します参加申し込みハガキをお送りください。

【お問い合わせ】 事務部事務課

患者さんのご紹介について



外来受付時間のご案内 ※予約の方・緊急の方を除く

受付時間……………8:00～11:00 (診療開始は8:30)

受付時間に来院された紹介状をお持ちの初診患者さんは、ご予約の有無にかかわらず診察いたします(一部の診療科を除く)。

■ご紹介にあたってのお願い

紹介状を作成いただき、当日お持ちいただくようご案内ください。事前予約による診察も行っておりますので、ぜひご活用ください。紹介状をお持ちの場合には、WEBまたは代表番号より患者さんご自身による事前予約も受け付けております。ご紹介の患者さんにもご案内いただければ幸いです。

【医療機関からのご予約】

医療機関専用ダイヤル 042-639-1114

平日 8:30～16:30

第2、4、5土曜日 8:30～14:30

医療機関専用ファックス 042-639-1115 (24時間対応)

*受付時間以降の受診は、翌日対応となります。

【患者さんからのご予約】

病院代表番号 0570-000-802

平日 8:30～16:30

第2、4、5土曜日 8:30～14:30

Web予約

医療機関からのWeb予約は下記二次元コードより事前申し込みの上ご利用ください。

【やくばと病診連携お申し込みフォーム】

<https://media.yakubato.jp/form-for-mailing-flyer>



Web予約 (Webでの予約変更はできません)

(血液腫瘍内科、腎内分泌代謝内科(腎・透析内科)、精神科、リハビリテーション科、産科を除く)

【やくばと病院予約】

https://patient.yakubato.jp/initial_appointments/

fuzoku-hosp-tokai-hachioji

